

いつもと違う今年の夏、新しい休日、夏休みの過ごし方

ながれ

宇郷 良介 (うごう りょうすけ/湘南工科大学・人間環境学科 教授)

1. 45年前の「夏」

45年前の1975年の夏。大学入学後、初めての夏休みに何を思い立ったか、当時返還間もない沖縄(1972年返還)に、小林旭の扮する船乗り(古い?)の如く頭陀袋一つ抱えて、約1ヵ月間、一人旅した。貧乏旅行で鹿児島まで国鉄(現JR西日本・九州)を使い、その後船底三等客室で船を3回乗り継ぎ、約10日間かけて日本最西端の与那国島まで放浪した。オジーとオバーだけの民宿に2週間近く滞在して、日本の近代化から取り残されたような周囲25km程の島内で思う存分自然・文化・伝統を探索した(当時、1日3食付きの民宿で1泊1,500円だった!)

その間、船中や民宿で地元の人たちや旅行者とのたくさんの出逢いを得た。それには、沖縄のおおらかで開放的な南国の雰囲気、そして何よりも果てしない海や、だだっ広い真っ青な空に囲まれた自然の影響が大きかった。カジキマグロや椰子ガニを肴に泡盛やオリオンビールを試飲(?)し、それまでの自分から何か大きくはじけるような感覚を味わった。その想いや感覚は、今でも鮮明で、歳をとるにつれますます美化されているかもしれない。しかし、そのとき体験した自然の雄大さや穏やかな時の流れが、その後「環境」に関わるルーツになっていることは間違いない。

2. 45年前の「夏」の後

45年前の体験の影響か、子ども達が小さな頃、都市部に居ても自然に少しでも触れさせたいと、家庭菜園(最盛期は500m²)で野菜類を自給したり、カブトムシやクワガタ採

りに山梨方面へ出かけたりした。昆虫採集が昂じてブリードになり、アウトドアからむしろインドアに変わり、裏庭から部屋はもちろん、玄関の棚まで芋虫の飼育瓶や虫かごがいっぱい積み重なっていった。

3. 45年後の「夏」

コロナの影響で、今年は自粛の夏。成人し都内に家庭をもった息子が、最近、小さい頃を思い出し、またカブトムシやクワガタのブリードを始めた。先日、息子の家を訪ねると、部屋の一区画に虫棚が整理され、卵から孵った幼虫やツヤツヤの成虫を自慢している。仕事はほぼテレワークで、自粛状態である。昆虫ブリードという、人間の都合で切り取った自然ではあるが、生命との関わりをもつことで、自粛にもかかわらず、ストレスとは程遠く、むしろ自分達の時間を十分楽しんでいる。そのためか、逆にテレワークでより効率的に仕事にも集中できているようだ。

4. 「新しい日常(New Normal)」へ

回帰的転換

最近、新しい日常(New Normal)への転換ということをよく聞く。これは日常的なマスクの着用や社会的距離のことではあるまい。自然・環境とどう共生するかという人間の根源的な振る舞い方の創造である。「知的」ではあっても「生物」としての原点を見つめ直すこと。スパイラル・アップした原点回帰を促されているように感じる。

この夏、45年前の一人旅を思い出しながら、息子からカブトムシをもらい受けて自粛の中で「昆虫日記」でもつけてみようかな!?